

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第172号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成25年6月21日

クマタカ



2013.2.24 新ひだか町

撮影者 北山政人（札幌市西区）



もくじ

注目されるホオジロハクセキレイの動向	
上士幌町 川辺 百樹	2
カモメ復権への道～厄介？なカモメ類の楽しみ方～	
北海道大学農学院 先崎 理之	4
赤い卵を産む北海道のツツドリ	
国立科学博物館 森 さやか	8
廃棄物による鳥たちの受難	
北海道野鳥愛護会会長 小堀 煌治	10
2012年度 北海道野鳥愛護会探鳥会記録（2012.4～2013.3）	12
平成25年度 総会報告	15
探鳥会 ほうこく	17
探鳥会 あんない	19
鳥民だより	20

注目されるホオジロハクセキレイの動向

上士幌町 川辺 百樹

ホオジロハクセキレイとの出会い

年来の夢であった北海道全域でのセグロセキレイ繁殖分布調査を2008年から開始しました。道内各地の河川を訪ね歩くなかで、予期せぬ出会いがありました。ホオジロハクセキレイ *Motacilla alba leucopsis*との出会いです。

最初の出会いは、2011年5月10日長万部町二股近くの長万部川の川原でした。セグロセキレイの生息を確認した砂礫川原に、1羽のホオジロハクセキレイ雄が下流から飛来し、水際で採食をはじめました。30分ほどの観察では、連れ合いは現れず独身のようでした。



ホオジロハクセキレイというのは、ハクセキレイの一つの亜種で、私たちの周りに普通に生息する亜種ハクセキレイ (*M. alba lugens*、以下ルゲンスハクセキレイ) と異なり過眼線がないので容易に見分けられます。ルゲンスハクセキレイが北海道、沿海州からアムール川河口付近、サハリン、千島列島からカムチャッカ半島で繁殖しているのに対し、ホオジロハクセキレイは、日本海や東シナ海を挟んだ対岸の大陸で繁殖しています。その範囲は、北はアムール川の下流域の北緯53.5度付近から南は香港の近くの北緯23度付近まで、そして西は四川省の東経96度付近までに



写真1. 須築川のホオジロハクセキレイ *Motacilla alba leucopsis* 雄（左）と
不明瞭な過眼線をもつ雌（右）ともに2012. 4. 10 せたな町

及びます。なお、ルゲンスハクセキレイの繁殖範囲の北ではタイワンハクセキレイ *M. a. ocularis* が繁殖しています。ハクセキレイのグループはユーラシア大陸とアラスカ、アフリカ北部に生息し、9亜種からなりますが、過眼線をもつのはルゲンスハクセキレイとタイワンハクセキレイだけです。

ホオジロハクセキレイとの二度目の出会いは2012年4月10日、せたな町の須築（すっき）川河口の小さな砂礫川原でした。雄雌各1羽が連れ添うように水際で採食していました（写真1）。ただし雌の方には不明瞭ながら過眼線があり純粹のホオジロハクセキレイとは思えない個体でした。この個体はルゲンスハクセキレイあるいはタイワンハクセキレイとの遺伝子交流を物語っているように思いました。近くにルゲンスハクセキレイの雌雄がおり、雄の方がホオジロハクセキレイに接近して軽く追いかけましたが、彼らは逃げ去ることなく採食を続けました。

ホオジロハクセキレイは礼文島にも出現していました。宮本誠一郎さんによると、2011年4月15日、2012年4月8、15日に観察したとのことです。また天売島でも2012年4月12日に観察されていました（<http://teuri-tera.blogspot.jp/2012/04/2012412.html>）。

日本列島への進出

ホオジロハクセキレイの繁殖が日本列島で初めて確認されたのは熊本県で、1968年のことです。そして1980年代までに福岡県、山口県、大阪府、福井県、長野県で繁殖が確認されました。インターネット上の情報によれば、2000年5月に埼玉県で観察されています。

ルゲンスハクセキレイが日本列島を南下したのと時を同じくして、ホオジロハクセキレイは日本列島を北上していました。かつて本州（北端部を除く）・四国・九州はセグロセキレイが繁殖するだけで、ハクセキレイの空白地帯でした。「高度経済成長」は都市や工場など新たな人為的環境を日本列島に大々的に造り出しました。ここにルゲンスハクセキレイとホオジロハクセキレイが入り込んできたと理解されます。しかし、ホオジロハクセキレイの北上はルゲンスハクセキレイの南下ほど勢いがないようです。日本列島北部の生息適地はルゲンスハクセキレイが先に押えてしまったため、ホオジロハクセキレイの繁殖分布拡大がままならないのだろうと推測しています。

注目される北海道での動向

ホオジロハクセキレイがいつから北海道に出現するようになったのか気になり、「北海道野鳥だより」のバックナンバーや「野鳥情報伝言板」に目を通しました。しかしホオジロハクセキレイについて書かれたものは見つけられませんでした（見落としがあるかもしれません）。藤巻裕蔵さんの「北海道鳥類目録改訂4版」（2012年刊）を見ると、「日本鳥類目録改訂第6版」（2000年刊）を引用して

いました。この目録には北海道では稀な（scarce）冬鳥と書かれているだけでした。そして昨年出版された「日本鳥類目録改訂第7版」では迷鳥（accidental visitor）に変更されました。ホオジロハクセキレイは北海道において稀な存在というのが一般的な認識といえるでしょう。

しかし、2011年と2012年に複数箇所で観察されたということは、近年飛来個体が多くなっている可能性があります。また2011年の観察は5月10日と、雄の渡りの時期としては遅いので、繁殖場所を求めて放浪中だったとみられます。このような放浪雄が、独身のルゲンスハクセキレイ雌とつがいになることがあってもおかしくありません。つまりホオジロハクセキレイの繁殖が北海道で現実のものとなる可能性も否定できないでしょう。

このようにホオジロハクセキレイの動向が注目されます。ホオジロハクセキレイの観察データをお持ちの方、また今後の観察でデータを得た方は、ぜひ本誌あるいは「野鳥情報伝言板」で報告してください。

ホオジロハクセキレイの情報を提供いただいた礼文島在住の宮本誠一郎さんに感謝いたします。

追記

この原稿を書き上げたあと、ホオジロハクセキレイのことが気になり、4月22、23日に渡島半島へ行ってきました。ホオジロハクセキレイとの再会はなりませんでしたが、驚きの出会いがありました。つがい状態となったセグロセキレイ雄とルゲンスハクセキレイ雌に出会ったのです。

セグロセキレイ雄はナワバリに入ったルゲンスハクセキレイ雄に対し激しい追跡を繰り返し徹底的に排除しようとしていました。一方ルゲンスハクセキレイ雌を攻撃することなく一緒に過ごし、セグロセキレイ雄がルゲンスハクセキレイ雌に接近したときには、この雌は体を低くして尾を立てる姿勢をとりました。まだ抱卵段階に入っていたのですが、1976年の観察からすると、ルゲンスハクセキレイ雌がこのままセグロセキレイ雄のナワバリに留まり統ければ、繁殖に至る可能性大です。

実は私とセキレイたちとの付き合いは、1976年のセグロセキレイとハクセキレイの種間つがい発見以来続いています。しかし、これ以上彼らとの濃密な付き合いは無理と判断し、セグロセキレイの北海道での繁殖分布をまとめて付き合いを清算することにしました。それで2008年から調査行脚をはじめたのですが、その道中でつがい状態になったセグロセキレイとルゲンスハクセキレイに出会うとは、なんたる因縁でしょう。

この種間つがいが首尾よく繁殖したら、後日報告することにしましょう。なお、セグロセキレイとハクセキレイの種間関係に興味をもたれた方は、BIRDER（2012年10月号）の拙文「敵対するハクセキレイとセグロセキレイの種間関係」をお読みください。

カモメ復権への道～厄介?なカモメ類の楽しみ方～

北海道大学農学院 先 崎 理 之

<筆者の自己紹介>

約17年間北海道で鳥を観察しています。現在は北大農学院修士課程でチュウヒなどの湿地性鳥類の研究に取り組むほか、北海道海鳥センターと共同でケイマフリの繁殖調査を行っています。

●はじめに～人気の低いカモメ類～

バードウォッチャーであれば、海辺でカモメの仲間が戯れる光景を目にする機会も多いのではないでしょうか。海と言えばカモメ、と言うくらいカモメは海には欠かせない存在と言えます。しかし、そんなカモメ類（特に大型カモメ類）は、昔から、「識別が難しい」、「地味」、「怖い」といった理不尽な理由により多くのバードウォッチャーから冷たい視線を浴びてきました。さらに、図鑑ごとに和名や学名が異なるという複雑な分類がこれに拍車をかけ、今日では、一部の奇人変人を除く多くの人にとって、「カモメ類=紛らわしい」というイメージが定着していることでしょう。どうやら、こういった負のイメージが、カモメ類を人気の低い、可哀想な（？）分類群に成り下げているようです。

しかし、本当はよく知られていないだけでカモメ類にも大きな魅力とロマンがあるのです！今回は、そんなカモメ類を愛してやまない筆者が、その名誉を挽回すべく、カモメ類の魅力をたっぷりと紹介したいと思います。

●紛らわしい分類のはなし

その前に、多くの人が敬遠しがちな話を先にしましょう。先にも述べた通り、「カモメ類=紛らわしい」というイメージは、分類のややこしさによるところが大きいようです。お手持ちの複数の文献を比べれば、各々で和名や学名、掲載種数が異なっているのを確認できるでしょう。ここでは、カモメ識別ハンドブック改訂版（氏原・氏原 2010）と日本鳥類目録第7版（日本鳥学会 2012）を取り挙げて、「ややこしい分類」について説明したいと思います。

ホイグリンカモメ *Larus heuglini* とニシセグロカモメ *L. fuscus* を例にします。カモメ識別ハンドブック改訂版では日本で記録がある種類としてホイグリンカモメ（およびタイミルセグロカモメ “*taimyrensis*”）が掲載されています。一方、日本鳥類目録第7版では、ホイグリンカモメは掲載されておらず、ニシセグロカモメという種類が「日本の鳥」として掲載されています。なぜでしょうか？

日本には *heuglini*（および “*taimyrensis*”）という個体群だけが渡来しています。カモメ識別ハンドブック改訂版はこれらを、ホイグリンカモメ *L. heuglini* という独立種と

して扱っています。一方、鳥類目録第7版はニシセグロカモメの亜種 *L. f. heuglini* として扱っています。つまり、こういった分類の問題は、日本へ渡来する個体群の分布の変化を示すものではなく、単に人間側の解釈の違い（種とのまとめ方や和名）に依るのだ、と捉える事が出来ます。



写真1. ニシセグロカモメ(タイミルセグロカモメ)森町

鳥類目録第7版は、2011年12月31日までに出版物に発表された種や亜種を、アメリカ鳥学会、イギリス鳥学会、「Howard and Moore」、「Clements」の4つのチェックリストに基づき再分類して作成されました。新たに目録に載ることになった種や亜種の和名は、分類に応じて日本鳥学会独自のルールに則って決定されています。一方、カモメ識別ハンドブック改訂版をはじめ国内の図鑑の多くは、鳥類目録第7版とは異なる文献を根拠に分類を行っており、出版物に発表されていない渡来記録のある種や亜種も扱っています。当然、それまでの鳥類目録第6版に未掲載の種や亜種には、図鑑の作成者が和名を与えています。分類や和名が紛らわしい理由はこのような事情に依ります。こうしてみると、「学会」と「世間」では分類に対する隔たりが大きいのが実情です。これ以上の混乱を避けるためにも、今後はその隔たりを埋めていく必要があるでしょう。

●北海道のカモメのはなし

さて、紛らわしい話はさておき、北海道で見られるカモメ類を紹介したいと思います。北海道では、これまで18～19種類のカモメ類が記録されています。これらは、ウミネコ、オオセグロカモメを除くと、旅鳥か冬鳥として見られます。本項目では、大型カモメ（オオセグロカモメやシロカモメなど）と中・小型カモメ（ウミネコやカモメなど）それぞれについて、まず、北海道での渡来状況・季節性を紹介します。次に、これらを観察するのに最適な筆者お勧めのカモメスポットも紹介したいと思います。

1. 大型カモメ

北海道ではオオセグロカモメ、セグロカモメ、シロカモメ、ワシカモメ、ニシセグロカモメ（ホイグリンカモメおよびタイミルセグロカモメ）、キアシセグロカモメ（モンゴルセグロカモメ）、アメリカセグロカモメ（日本鳥類目録第7版ではセグロカモメの亜種）、カナダカモメ、アイスランドカモメの8ないし9種類の大型カモメの記録があります。

1-1. 普通種

このうち、オオセグロカモメ、セグロカモメ、シロカモメ、ワシカモメの4種が普通種と言えます。中でも、年間を通して見られる最普通種なのがオオセグロカモメです。札幌のビル街などで繁殖するなど、繁殖力の高いたくましい鳥というイメージがありますが、近年は各地で繁殖数が激減しているようです。原因は不明ですが、オジロワシによる捕食圧などが考えられます。繁殖個体とは別に冬季には北方から多数が渡来します。なお、本来の生息地ではない北米ではバードウォッチャー垂涎の大珍鳥です。



写真2. オオセグロカモメ 天売島

セグロカモメは、道南を除くとほとんどが旅鳥として渡来します。岩礁海岸よりも砂浜海岸で多く見られる傾向があります。秋の渡来は8月下旬から始まり、9月中旬下旬から本格化します。11~12月までは多数が見られますが、厳冬期には非常に少なくなります。春の渡来は3月下旬から始まり、日本海側では秋よりも多数が渡来しますが、太平洋側、オホーツク海側では秋ほど渡来しません。越夏することはまれで、6月以降に見られることはほとんどありません。

シロカモメは、冬の北海道を代表する大型カモメでしょう。オオセグロカモメよりも一回り大きく、日本産大型カモメ類中、最大の種類です。秋は主に9月下旬から渡来します。セグロカモメと同様に砂浜海岸を好み、広い砂浜に隣接した河川河口、港では数十から数百の群れが見られます。道北と道東には多数が渡来しますが、岩礁海岸が多い道南への渡来数は八雲町や長万部町を除く多くありません。

日本へ渡来するのは、ユーラシア大陸で繁殖する大型の亜種ですが、えりも町や稚内市ではアラスカで発信機を付けられた別亜種の記録もあります。

ワシカモメも冬の北海道を代表する大型カモメでしょう。セグロカモメ、シロカモメとは異なり、岩礁海岸を好むため、道南、小樽や積丹半島、日高地方では多数が見られます。秋は他の大型カモメと同様に9月から渡来します。しかし、夏季にも若い個体が全道で見られ、利尻島ではオオセグロカモメとつがいとなり繁殖した記録があります。

1-2. 希少種

その他の大型カモメは秋から春にかけてわずかに見られるに過ぎません。ニシセグロカモメ（ホイグリンカモメおよびタイミルセグロカモメ）は、セグロカモメ群中に見られ、セグロカモメの100羽程度の群があれば、1~数羽が見られます。キアシセグロカモメ（モンゴルセグロカモメ）はさらに少ないですが、4月の日本海側には毎年一定数が渡来しているようです。一方で、北米に分布する（亜種）アメリカセグロカモメ、カナダカモメはめったに見られません。カナダカモメは道南では複数個体が越冬しており、道東でも毎年記録がありますが、渡来数は非常に少ないと思われます。アイスランドカモメはこれらのいずれよりも渡来数が少なく、観察記録は数えるほどしかありません。



写真3. カナダカモメ 森町

以上のような、希少種を見つけるのもカモメ類観察の醍醐味であり、大きな魅力と言えます。識別は難しいですが、何種類ものカモメ類が入り混じる群の中から、希少種を見つけたときのうれしさは格別です。

2. 中・小型カモメ

北海道で記録のある中・小型カモメはウミネコ、カモメ、ユリカモメ、ズグロカモメ、ボナパルトカモメ、ヒメカモメ、ヒメクビワカモメ、ゾウゲカモメ、ミツユビカモメ、アカアシミユビカモメの10種とされます。このうち、ウミネコ、カモメ、ユリカモメ、次いでミツユビカモメが普通種と言えるでしょう。また、夏鳥のウミネコを除くと全てが旅鳥または冬鳥かいわゆる迷鳥とされます。

2-1. 普通種

最普通種はウミネコです。北海道では夏鳥であり、天売島や利尻島などで集団繁殖しています。繁殖地への渡来は2月下旬頃から始まり、8月中旬には繁殖地を離れます。8~11月には北海道本土の海岸に繁殖後のウミネコが集結します。標識調査によると北海道だけでなく青森県で繁殖した個体も繁殖後は北海道近海に渡来するようです。その後、本州以南に南下し越冬します。ちなみにウミネコは、世界的には日本周辺にしか分布していない貴重なカモメです。



写真4. ウミネコ 函館市

カモメは冬鳥として全道の海岸に渡来しますが、特に11~12月と3月下旬~5月に多く、大きな河川の河口では数千羽規模の大群が見られることがあります。渡来数には年変動があり、多い年には春季の雪解け時に内陸の牧草地や水田でも群れが見られます。

ユリカモメは北海道ではほとんどが旅鳥とされます。全道の海岸で数羽から数十羽の群れが見られ、場所によっては数百~千羽程度が見られることがあります。ウミネコやカモメよりもさらに小型で、赤い嘴と脚が目立つかわいいらしいカモメです。冬羽では白い頭が、夏羽では帽子をかぶったように黒くなります。

これらよりも馴染みは薄いですがミツユビカモメもまた北海道を代表する中型カモメでしょう。本種は他種と異なり外洋を主な生活圏とします。北海道では多くが旅鳥で、三陸から関東の沖合で越冬します。全道的に秋に渡来数が多く、10~11月には大きな河川の河口などで数千羽規模の大群が見られますが、日本海側では多くありません。道南太平洋側では冬から春にも悪天候時には大群が見られます。道東では夏季は若い個体が多数越夏しており、こうした越夏個体の数は数百~千羽を超えることがあります。

2-2. 希少種

上述の種以外の希少種を北海道で見ることは困難です。ヒメカモメ、ズグロカモメ、ボナパルトカモメ、ゾウゲカモメはわずかな記録があるに過ぎません。これらはいわゆる迷鳥の部類に属します。地域と条件によって見られる可能性が比較的高いのはヒメクビワカモメとアカアシミツユ

ビカモメです。

ヒメクビワカモメは、淡いピンク色が美しい全長30cm程の小さなカモメです。極北で繁殖するこのカモメは、初冬の大荒れのオホーツク海で観察されます。大波の間をヒラヒラと舞う姿は、見る者を虜にするほど美しいですが、渡来数には年変動があり、悪天候時以外にはまず見られないことから、観察難度は高いと言えるでしょう。



写真5. ミツユビカモメの群 八雲町



写真6. ヒメクビワカモメ 斜里町



写真7. アカアシミツユビカモメ 八雲町

アカアシミツユビカモメは、ベーリング海の島嶼、アリューシャン列島の一部で繁殖する外洋性の中型カモメです。ミツユビカモメと異なり、脚が赤いことが最大の特徴です。非繁殖期も繁殖地近海に留まるとされていますが、

中には南下するものもあり、北海道近海へは毎年少數が渡来しているようです。秋季のオホーツク海、太平洋側で観察の可能性があり、悪天候時にミツユビカモメの大群を見かけたら要注意。ミツユビカモメとの識別に注意が必要ですが、その中からアカアシミツユビカモメを見つけたときの喜びはひとしおでしょう。

3. 北海道のカモメスポット

カモメ類の魅力のひとつは、個体数が多く、海さえあれば全道どこでも見られる点でしょう。しかしながら、広い北海道には選りすぐりのカモメスポットが点在しています。今回は、その中から筆者が特にお勧めするカモメスポットをいくつか紹介しましょう。

3-1. 森町砂原砂崎～沼尻漁港

シロハヤブサの名所であった森町砂崎岬周辺は北海道最大の大型カモメ越冬地であり、とにかく数を見たい方にお勧めのポイントです。越冬個体のほとんどはオオセグロカモメですが、セグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメも越冬しています。また、数羽のカナダカモメが毎年越冬しており、秋から冬の悪天候時にはアカアシミツユビカモメが見られたこともあります。カモメ類だけでなく、コアホウドリやトウゾクカモメ、ウトウなどの海鳥が多数見られる一級の海鳥探鳥地と言えるでしょう。

3-2. むかわ町鶴川漁港～鶴川河口

カモメ類の個体数は多くありませんが筆者がこれまで最も長く観察を行ってきた場所で、普通種をじっくり観察したい方に特にお勧めです。適期は秋～春。道央圏の中ではシロカモメの越冬個体数が多いのが特徴です。鶴川漁港では2012年まで9年間アメリカセグロカモメ1個体が越冬していました。また、春季の鶴川河口ではキアシセグロカモメ（モンゴルセグロカモメ）が比較的よく見られます。夏季には例年少數のワシカモメが越夏しています。



写真8. 鶴川漁港

3-3. 斜里町斜里漁港

10月から1月にかけては、知床半島の麓、オホーツク海に面した斜里漁港が道内随一のカモメスポットとなります。10月のセグロカモメの大群中にはニシセグロカモメ（ホイグリンカモメおよびタイミルセグロカモメ）が散見され、

カナダカモメの記録もあります。12月以降はヒメクビワカモメの記録が多いことで有名ですが、近年はゾウゲカモメやアカアシミツユビカモメの群れの記録もあり、カモメウォッチャーなら一度は訪れてみたい探鳥地です。

3-4. 天売島

言わずと知れた世界的な海鳥繁殖地です。島内ではウミネコとオオセグロカモメの繁殖行動の他、ウトウの育雛期には、カモメ類が餌を持って帰巣するウトウを襲う光景を見ることが出来ます。カモメ類の繁殖生態や島内にいるカモメ類の年齢、餌略奪を通じたウトウとの関わりなどの観察を通して、カモメ類をより深く知ることが出来る素晴らしいカモメスポットです。

●おわりに～カモメ類とわたしたち～

カモメ類は、古くからわたしたちの身近な存在でした。かつて、日本海のある島では、人々は春になると「ゴメ」の卵を少しばかり獲ってきて食べていました。「ゴメ」とはウミネコの事ですが、その卵は人々にとって貴重なタンパク源となっていたのでしょう。また、魚群探知機などがなかった時代には、船上の漁師たちはカモメ類などがつくる「鳥山」を目当てに魚群を探していました。わたしたちはカモメ類をうまく利用しながら生活していたのです。



写真9. 水産廃棄物に群がるカモメ類 森町

一方、現在は、カモメ類がわたしたちをうまく利用しているように思われます。オオセグロカモメは漁港の岸壁、民家の屋根の上や高層ビルの屋上までを営巣場所としています。漁村では漁師が捨てる魚のあらにカモメ類が群がっています。沖合でも同様で、船上からの廃棄物は多くのカモメ類に利用されています。

わたしたちの身近で生活してきたカモメ類は、わたしたちの身近な存在であるからこそ、魅力的なように思われます。身近に棲む彼らの生きざまは、筆者にはどこか人間らしく感じられます。彼らを観察すればするほど、種類あるいは個体によってさまざまな個性があることを知ることが出来るからです。識別が苦手という人でも、彼らが海岸に戯れる姿や漁港で餌をあさる姿、離島などの繁殖地での子育ての様子を観察してみてください。彼らが必死に生きる姿を見れば、きっと、他の鳥とは違った面白い発見があるはずです。

赤い卵を産む北海道のツツドリ

国立科学博物館 森 サ や か

カッコウ類は自分では巣を作らず、卵を他種の巣に産みこむ習性を持つことがよく知られています。この習性は育児寄生の一種で、托卵と言います。カッコウ類は托卵することによって、卵を温めたり、子育てをする労力を托卵相手（宿主）に任せてしまうことができます。カッコウ類の雛は、宿主の雛よりも早く孵って宿主の卵を巣から落とし、仮親から受ける世話を独り占めしてしまいます。したがって、宿主は托卵された卵を受け入れてしまうと、子育ての労力をかけても自分の子は残せないということになります。そのため、宿主は托卵された卵を排除するために、自分の卵とカッコウ類の卵を見分ける能力を発達させたり、見分けやすいような卵の色や模様を進化させます。一方、托卵を成功させたいカッコウ類もこれに対抗して、より見分けられにくくように宿主の卵に似せた卵を産むように進化します。これを卵擬態と言います。この宿主と托卵種の競争関係は、人間社会の軍拡競争のような様相を示していることから、進化的軍拡競争と言われます。こうしたプロセスを経て、一般的にカッコウ類の卵は主要な宿主の卵と色や大きさがよく似るようになります。

日本には、ジュウイチ、ホトトギス、ツツドリ、カッコウの4種のカッコウ類が繁殖しています。本州では、ジュウイチは主にコルリやルリビタキに、ホトトギスは大部分がウグイス、ツツドリは主にセンダイムシクイに、カッコウは主にホオジロ、モズ、オオヨシキリに托卵していることが知られています。このうち、ホトトギスは渡島半島南部に少数観察されるだけで、北海道にはほとんど生息していません。本州では、ホトトギスはウグイスと同じ赤い卵を産み、ツツドリはセンダイムシクイの小さな白っぽい卵に似た、白くて小さい卵を産んでいます。ところが北海道では、ツツドリがホトトギスに代わってウグイスに赤い卵を托卵していることが Higuchi & Sato (1984) によって明らかにされました。ウグイスの卵の大きさはセンダイムシクイよりも大きいのですが、北海道のツツドリが産む赤い卵の大きさは、ウグイスの卵の大きさに近く、本州のツツドリが産む白い卵と比べても明らかに大きいことも分かっています (Higuchi 1998)。

こうした事実が発見されて以来、北海道のツツドリは本州での主要な宿主であるセンダイムシクイにも托卵している可能性が高いため、その際には何色の卵を産むのかに関心を持たれていました。しかこれまで、センダイムシクイの巣でツツドリの雛が育てられているという確実な観察例はありませんでした。断片的な観察報告としては、種不明のムシクイ類の巣内でツツドリの雛が観察された例がありましたが、宿主の種までは特定できておりません。卵の色も

確認されていませんでした。また、北海道のセンダイムシクイへの赤い卵の托卵例は4例報告されていましたが、いずれも托卵種は特定できていませんでした（中西 1942、樋口・尾崎 1994、川路 2009、上沖ら 2011）。最初の3例では雛を確認する前に巣が捕食に遭い、最後の1例では宿主の雛が巣立っても赤い卵は孵化しなかったため、托卵種の同定はできなかったとのことです。

私は共同研究者と共に、北海道のセンダイムシクイの巣にツツドリの赤い卵が托卵され、孵った雛が巣立ちまで養育された事例を初めて確認し、日本鳥学会誌英文誌で報告しました (Mori et al. 2012)、ここでは、その内容をご紹介します。

<観察内容>

北海道帯広市南部の農耕地帯の分断化した森林で、2006～2010年にかけて3巣のセンダイムシクイの巣を発見しました。そのうち2010年6月9日に発見した1巣には赤い卵が托卵されていました。托卵巣の営巣場所は主にカシワとハルニレからなる防風林の、ミヤコザサで密に覆われた林床でした。巣はドーム型で側面に入り口があり、巣材は主にイネ科の枯れ草でした。雛の外部形態から托卵種の同定をするため、7月上旬まで托卵巣の観察を続けました。

6月9日に巣を発見した際には、センダイムシクイの白っぽい卵が6卵と、赤い卵が1卵抱卵されていました（図1）。白い卵の大きさは19×11mm、赤い卵の大きさは22×15mmでした。計測では、卵を巻尺の上に載せて、直上から目盛りを読み取りました。調査による悪影響を避けるため、白い卵は1卵のみ計測しました。

6月21日には、巣には4～5日齢のカッコウ類の雛1羽だけがおり、宿主の雛や卵を巣の周辺で見つけることはできませんでした。雛の口内は鮮やかなオレンジ色で、上顎および下顎の先端に近い辺縁部の左右に目立つ黒斑がありました（図2）。

6月25日の雛（8～9日齢）は、暗い黒っぽい羽毛で背面と頭部が覆われていました。

6月28日（11～12日齢）には、巣の中がいっぱいになるくらいに雛が大きく成長していましたが、羽毛はまだ成長中でした。頭部、顔、喉と胸の羽毛は黒に近い黒褐色でしたが、腹部は白黒のまだらでした（図3）。

7月3日（16～17日齢）には、雛の体の大きさは完全に巣の大きさを超えており、巣の周囲を歩くことができました。背面、顔、喉、胸の羽毛は、暗い黒に近い黒褐色で、各羽にかすかに白い縁取りがありました。頭頂部には目立つ白斑が1つありました。腹部は暗い黒に近い黒褐色と白

の不明瞭な横縞模様でした（図4）。

7月6日に巣を確認した際には、雛も仮親も周囲には見当たらず、雛は巣立ちに成功したと思われました。

＜赤い卵の托卵種の同定＞

これらの雛の形態的特徴はすべて、これまでに報告されたツツドリの形態的特徴と一致していました。まず、巣内雛の口内の目立つ黒斑は、Tojo et al. (2002) に記載されたツツドリの雛の特徴と一致していました、次に、巣立ち直前の雛の背面、顔、喉、胸が黒に近い黒褐色で、腹部は白と黒褐色の不明瞭な横縞模様であったことも、Higuchi & Payne (1986) の記載と一致し、ツツドリであることを示していました。3つ目に、頭部に見られた白斑もツツドリの雛の特徴として報告されていました (Higuchi & Payne 1986)。また、卵の色と大きさも、北海道でウグイスに托卵されたツツドリの卵の色と大きさの範囲と一致していました (Higuchi 1998)。



図1. センダイムシクイの巣に托卵されたツツドリの赤い卵 2010. 6. 9 北海道帯広市



図3. 図1の赤い卵から孵化した11～12日齢のツツドリの雛 2010. 6. 28

したがって、北海道のツツドリがセンダイムシクイの巣に卵擬態していない赤い卵を托卵し、その雛が巣立ちまで養育されたということが、本研究によって初めて確認されました。前述のこれまでに北海道のセンダイムシクイの巣で発見してきた赤い卵も、おそらくツツドリの卵であったと考えられます。

＜なぜセンダイムシクイにも赤い卵を産むのか＞

ウグイスは自分の卵と異なる色の卵を識別する能力が非常に高く、異なる色の卵を托卵された巣を放棄する性質が非常に強いことが分かっています。一方、白っぽい卵を産む日本のムシクイ類は、卵の色を識別しておらず、自分の卵とは異なる色の卵も受け入れます。北海道ではホトトギスがほとんど生息していないため、ツツドリはホトトギスと競争することなくウグイスの巣を利用することが可能になります。そのため北海道では、ツツドリが卵の識別能力が高いウグイスへの托卵を成功させるために、赤い擬態卵



図2. 図1の赤い卵から孵化した4～5日齢のツツドリの雛 口内の黒斑が目立つ。 2010. 6. 21



図4. 図1の赤い卵から孵化したツツドリの特異的な羽衣を持つ16～17日齢の雛 2010. 7. 3

を進化させたのでしょうか、しかし、ウグイスが少ない場所では、単純に多いものが利用しやすいという理由でセンダイムシクイにも托卵する傾向が強くなると考えられます。

Higuchi (1998) は、ウグイスが多い道央では、ウグイスがツツドリの主要な宿主となっていることを報告しています。本調査地では、センダイムシクイは普通に繁殖していますが、ウグイスはまれです。したがって、この調査地のツツドリは、ほとんどセンダイムシクイにのみ托卵しているものと考えられます。本研究では、発見された3巣のセンダイムシクイの巣のうち、1巣でツツドリの赤い卵の托卵が見られました。ウグイスの少ない札幌（川路2009）での研究でも、5巣のうち3巣にツツドリのものと思われる赤い卵が托卵されていたとの報告があります（上沖ら 2011）。これらの結果から、ツツドリのセンダイムシクイへの托卵は比較的よく起こっていることが示唆されます。

カッコウも複数の種を宿主として利用していますが、それぞれの宿主によく擬態した卵を托卵します。カッコウの場合は、雌がそれぞれ自分の卵とよく似た卵を産む特定の宿主を選んでいることが分かっており、卵の色や模様は雌の遺伝子によって決まっていることも明らかにされています。北海道内のツツドリの場合は、ウグイスに擬態した赤い卵しか見つかっていないことから、カッコウのような利用する宿主別に進化した種内系統は存在しないのかもしれません。

＜引用文献＞

Higuchi H & Sato S (1984) An example of character release in host selection and egg colour of cuckoos

- Cuculus* spp. in Japan. Ibis 126: 398-404.
Higuchi H & Payne RB (1986) Nestling and fledgling plumages of *Cuculus saturatus horsfieldi* and *C. poliocephalus poliocephalus* in Japan. Jap. J. Ornithol. 35: 61-65.
樋口広芳・尾崎研一 (1994) センダイムシクイへの赤い卵の托卵例. Strix 13: 227-229.
Higuchi H (1998) Host use and egg color of Japanese Cuckoos. In: Rothstein SI & Robinson SK (eds) Parasitic Birds and Their Hosts- Studies in coevolution-. pp 80-93. Oxford University Press, Oxford.
上沖正欣・川路則友・川路仁子・上田恵介 (2011) 北海道におけるヤブサメ *Urosphena squameiceps* およびセンダイムシクイ *Phylloscopus coronatus* への赤色卵の托卵例. Strix 27: 97-103.
川路則友 (2009) ツツドリ *Cuculus saturatus* によるメジロ *Zosterops japonicus* の巣への赤色托卵例. 日本鳥学会誌 58: 98-102.
Mori S, Kondo Y & Higuchi H (2012) An Eastern Crowned Leaf Warbler *Phylloscopus coronatus* nest parasitized by an Oriental Cuckoo *Cuculus saturatus* with a reddish egg in Hokkaido. Japan. Ornithol Sci. 11: 109-112.
中西悟堂 (1942) 野鳥を訪ねて. 日新書院, 東京
Tojo H, Nakamura S & Higuchi H (2002) Gape patches in Oriental Cuckoo *Cuculus saturatus* nestlings. Ornithol. Sci. 1: 145-149.

廃棄物による鳥たちの受難

北海道野鳥愛護会会長 小堀 煌治

新年講演会で玉田氏の講演「沈黙の春再び」を拝聴しましたが、講演を聞いていて脳裏に浮かんだのは1990年頃の宮島沼の春の光景です。

渡りを控えたこの時期、北に帰る鳥たちは上空を活発に飛び回り渡りのリハーサル。一方、群を離れたハクチョウ類やマガソが冬枯れの沼に点在し、頭を羽の中に入れ、下尾筒は緑色の便で汚れ、うずくまつたり、立ったまま、ものうげに眠っていました。

鉛の散弾による鉛中毒にかかっていたのです。北に帰る仲間を見送り、ハクチョウ類やマガソが次々に死んでいました。1990年は衰弱したものや死体で回収されたマガソが80羽。1983年から1995年までに回収されたマガソとハクチョウ類が合計211羽。こんな記録が残っています。

宮島沼では1988年まで銃によるカモ猟が盛んに行われていました。1989年の春に88羽のハクチョウ類の死体が

回収され、その年からようやく狩猟が自粛されるようになりました。それまでも春の渡りの時には多くのカモ類やガン類が宮島沼を中継地として利用していて、その数は年々



鉛中毒死したオオハクチョウ
1989. 5. 9 美唄市宮島沼 星子廉彰さん撮影

増え続け1984年にはマガンが1万を超えるました。しかし秋の渡りの時は10月1日の狩猟開始と同時に一斉に南下していました。今のように秋にも長く滞在するようになったのは狩猟が自粛されてからです。

沼の底には長年の狩猟により鉛の散弾が溜まっています。沼の周辺で植物などを採餌する時、小石と間違えて散弾を飲み込んでしまい鉛中毒にかかったのです。カモ類は穀物などの消化を助けるため、胃（筋胃）に砂や小石などを入れておき食物をすりつぶす習性があるのです。

死体を解剖した結果、農作物も食べるので農薬などの化学物質も多く検出されたそうですが原因は鉛中毒です。

ようやく国や道が鉛中毒防止のため、沼に砂をまいたり、網をかぶせたりして、散弾を埋め込む作業を行い、これが功を奏し、無残な姿を見ることが無くなりました。

民家を借り細々と続いていたビジターセンターも立派に生まれ変わり、観光客も立ち寄るような名所となりました。マガンの過密化など新たな課題もありますが、水鳥が安心して生活できる宮島沼が続くように願っています。

福島原発の事故による放射線の影響も深刻のようです。イギリスのインディペンデント紙が2012年2月3日に報じたところによると、日、米、仏、デンマークなど合同の環境調査チームが事故の後、いち早く2011年3月に現地に入り、7月の繁殖期にはチャルノブイリでの調査と同じ14種の野鳥の調査をした結果、短命化、突然変異、生殖能力の低下などチャルノブイリよりも深刻な結果が出たということです。調査の最終的な結果報告を待たなければ何とも言えないのですが、福島は低線量被爆なので影響は今後ゆっくり出てくるとも言われています。何とも不気味な感じがします。

解剖学者で蝶が大好きという「バカの壁」の著者養老猛司氏が新聞の記事で、本当どうか分らないが、と前置きし、

「鳥葬の国チベットで鳥が人を食べなくなつた。ヒトは生態系の頂点に位置するので食べ物などによる毒物が体に濃縮して溜まっている。野生動物は敏感で毒物を本能的に避けているのではないか」、こんな文章を書いていました。

人間による地球のオーバーユース（資源の過剰使用）は今や深刻な問題で資源探しは南極や海底にまで及んでいます。人間が今のような消費生活を続けていくと将来、資源確保のため地球が2個も3個も必要になるとも言われています。人間の贅沢な暮しもそろそろ限界がきたようです。「足るを知る」時代が来たようです。

野鳥の受難はほとんどが人間の都合によるもの、特に人間が放出する放射能を含めたゴミ。

近年では缶にクチバシを挟まれたタンチョウ、釣り糸に絡まれたハシジロアビやウミガラス、カミソリの替え刃がクチバシにはまり餌を捕れず衰弱していくばかりのミヤコドリ。これは我々がたまたま目にした象徴的な事故で、多分氷山の一角なのでしょう。特別天然記念物のタンチョウの救済には行政の機関が乗り出しましたが、普通の野鳥はだれも助けてはくれません。我々民間人はこんな光景を見



釣り糸に絡まったハシジロアビ
2006. 3. 8 浦河港 筆者撮影



釣り糸に絡まったウミガラス
2012. 1. 12 石狩湾新港 坂井伍一さん撮影



カミソリの替刃が嘴にはさまったミヤコドリ
2011. 10. 12 石狩湾新港東側の浜 筆者撮影

ても法律の規制があり、ただ手をこまねいているばかり、何ともやりきれない思いです。

わが会も今年で創立43年。この間、野鳥に楽しみをもらい、時には癒され、野鳥には何かと世話になってきました。「鶴の恩返し」ならぬ愛護会の野鳥への恩返し、何かできないものかと考えています。ゴミ拾いのような地味で小さな事でもいい。何かできることがないのか、会員の皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

2012年度 北海道野鳥愛護会探鳥会記録 (2012.4~2013.3)

科・種名	探鳥地	モエレ沼	宮島沼	野幌森林公園	藤の沢	野幌森林公園	千歳川	鶴川河口	植苗ウトナイ	厚別川	福移	野幌森林公園	石狩川河口	鶴川河口	野幌森林公園	石狩川河口	宮島沼	野幌森林公園	野幌森林公園	ウトナイ湖	野幌森林公園	小樽港	野幌森林公園	ウトナイ湖	記録回数	
		月	4	4	4	5	5	5	6	6	6	7	8	8	9	9	10	10	11	11	12	1	2	3		
	日	15	22	29	5	6	13	27	3	10	17	24	15	19	26	2	16	7	14	4	11	2	13	3	17	
キジ科																										
キジ												●														
カモ科																										
ヒシクイ																										
マガム		●																							●	
シジュウカラガム																										
コブハクチョウ																										
オオハクチョウ		●							●																	
オシドリ			●	●	●	●												●							4	
ヨシガモ																										2
ヒドリガモ		●						●									●		●						5	
マガモ		●		●	●	●	●	●		●						●	●	●	●	●	●	●	●	12		
カルガモ								●									●	●	●						2	
ハシビロガモ		●															●	●	●						2	
オナガガモ		●																								4
コガモ		●						●									●	●	●	●	●	●	●	●	8	
ホシハジロ		●																								1
キンクロハジロ		●																								2
スズガモ																		●			●					2
シノリガモ																										1
ホオジロガモ																										3
ミコアイサ		●	●															●								4
カワアイサ		●	●																●							3
ウミアイサ																				●						1
カツツブリ科																										
カツツブリ		●		●													●	●	●							5
アカエリカツツブリ																										1
カムムリカツツブリ																										1
ミニカツツブリ																										1
ハジロカツツブリ																	●		●	●	●				3	
ハト科																										
キジバト		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13	
アオバト																	●									1
アビ科																										
アビ																										1
オオハム																										1
ウ科																										
ヒメウ																										1
カワウ		●																								1
ウミウ			●														●	●	●						4	
サギ科																										
アオサギ		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13	
ダイサギ																				●			●		●	3
クイナ科																										
バン																		●								1
オオバン		●																		●						2
カッコウ科																										
ツツドリ									●				●		●										2	
カッコウ									●	●			●												3	
チドリ科																		●								
ダイゼン																			●							1
メダイチドリ																				●						1

科・種名	探鳥地	モエレ沼	宮島沼	野幌森林公園	藤の沢	野幌森林公園	千歳川	鵠川河口	植苗ウトナイ	厚別川	野幌森林公園	福移	野幌森林公園	石狩川河口	鵠川河口	野幌森林公園	石狩川河口	宮島沼	野幌森林公園	野幌森林公園	ウトナイ湖	小樽港	野幌森林公園	記録回数		
		月	4	4	4	5	5	5	6	6	6	6	7	8	8	9	9	10	10	11	11	12	1	2	3	
		日	15	22	29	5	6	13	27	3	10	17	24	15	19	26	2	16	7	14	4	11	2	13	3	17
シギ科																										
オオジシギ									●	●		●													3	
タシギ															●										1	
オグロシギ														●											1	
チユウシャクシギ															●										1	
アオアシシギ															●										1	
ソリハシシギ														●											1	
イソシギ								●		●			●	●		●									5	
オバシギ														●											1	
ミュビシギ													●			●									2	
トウネン								●					●		●										3	
ヒバリシギ														●											1	
キリアイ													●												1	
カモメ科																										
ユリカモメ		●							●								●								3	
ウミネコ													●	●		●									3	
カモメ		●																							1	
ワシカモメ																				●					1	
シロカモメ		●	●					●												●					4	
オオセグロカモメ								●	●				●	●		●				●					6	
アジサシ													●												1	
ウミスズメ科																										
ウミガラス																				●					1	
ケイマフリ																				●					1	
ミサゴ科																										
ミサゴ																●									1	
タカ科																										
トビ		●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	20	
オジロワシ								●	●	●			●				●		●	●	●	●	●	●	9	
オオワシ																			●	●	●	●	●	●	3	
チュウヒ									●								●		●	●					3	
ハイタカ							●											●							2	
オオタカ						●																			1	
ノスリ		●						●																	3	
カワセミ科																										
カワセミ						●		●					●												3	
キツツキ科																										
アリスイ						●							●												2	
コゲラ						●	●	●	●				●		●		●		●	●	●	●	●	9		
オオアカゲラ							●						●												4	
アカゲラ		●	●	●	●	●	●	●	●				●		●		●		●	●	●	●	●	15		
ヤマゲラ				●		●													●	●				4		
ハヤブサ科																										
チゴハヤブサ										●															1	
モズ科																										
モズ								●					●		●										3	
カラス科																										
カケス		●																								1
カササギ																										1
ハシボソガラス		●	●			●	●	●	●	●			●		●		●		●	●	●	●	●	15		
ハシブトガラス		●	●	●	●	●	●	●	●	●			●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	22		
キクイタダキ科																			●							
キクイタダキ																			●						2	

科・種名	探鳥地		モエレ沼	宮島沼	野幌森林公園	藤の沢	野幌森林公園	千歳川	鵠川河口	植苗ウトナイ	厚別川	野幌森林公園	福移	野幌森林公園	石狩川河口	鵠川河口	野幌森林公園	石狩川河口	宮島沼	野幌森林公園	野幌森林公園	ウトナイ湖	小樽港	野幌森林公園	記録回数		
	月	日	4	4	4	5	5	5	5	6	6	6	6	7	8	8	9	9	10	10	11	11	12	1	2	3	
			15	22	29	5	6	13	27	3	10	17	24	15	19	26	2	16	7	14	4	11	2	13	3	17	
シジュウカラ科																											
ハシブトガラ	●	●	●	●	●	●	●								●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	15	
ヤマガラ						●	●	●	●							●		●	●	●	●	●	●	●	●	8	
ヒガラ						●	●	●	●	●					●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	10	
シジュウカラ	●		●	●	●	●	●		●	●				●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	17	
ヒバリ科																											
ヒバリ	●	●						●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●								7	
ツバメ科																											
ショウドウツバメ													●		●	●										3	
イワツバメ									●	●																2	
ヒヨドリ科																											
ヒヨドリ	●		●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	17	
ウグイス科																											
ウグイス						●	●	●	●		●		●	●	●				●							9	
ヤブサメ						●	●	●	●		●		●		●											7	
エナガ科																											
エナガ						●	●	●	●											●	●	●	●	●	8		
ムシクイ科																											
オオムシクイ													●													1	
エゾムシクイ									●																	1	
センダイムシクイ						●	●	●	●		●		●		●		●								8		
メジロ科																											
メジロ						●	●	●	●		●					●										6	
センニユウ科																											
エゾセンニユウ													●	●	●											3	
ヨシキリ科																											
オオヨシキリ													●	●												2	
コヨシキリ													●	●	●		●									5	
レンジャク科																											
キレンジャク																											
ゴジュウカラ科																											
ゴジュウカラ						●	●	●	●						●		●		●	●	●	●	●	●	●	12	
キバシリ科																											
キバシリ						●		●	●					●		●		●		●	●	●	●	●	●	10	
ミソサザイ科																											
ミソサザイ						●			●																	2	
ムクドリ科																											
ムクドリ		●											●		●		●		●							5	
コムクドリ													●		●											2	
カワガラス科																											
カワガラス									●																	1	
ヒタキ科																											
クロツグミ						●			●					●												4	
マミチャジナイ									●																		1
アカハラ									●					●		●										4	
ツグミ																											
ノゴマ													●	●													2
コルリ													●														1
ルリビタキ													●														1
ノビタキ		●	●										●		●		●		●							9	
コサメビタキ													●		●		●		●							3	
キビタキ													●		●		●		●							6	
オオルリ													●														5

科・種名	探鳥地	モエレ沼	宮島沼	野幌森林公園	藤の沢	野幌森林公園	千歳川	鵠川河口	植苗ウトナイ	厚別川	野幌森林公園	福移	野幌森林公園	石狩川河口	鵠川河口	野幌森林公園	石狩川河口	宮島沼	野幌森林公園	野幌森林公園	ウトナイ湖	小樽港	野幌森林公園	ウトナイ湖	記録回数	
		月	4	4	4	5	5	5	6	6	6	6	7	8	8	9	9	10	10	11	11	12	1	2	3	
	日	15	22	29	5	6	13	27	3	10	17	24	15	19	26	2	16	7	14	4	11	2	13	3	17	
スズメ科																										
ニュウナイスズメ		●	●			●			●			●			●										6	
スズメ	●	●			●			●	●	●		●			●							●	●		10	
セキレイ科																										
キセキレイ					●		●											●							3	
ハクセキレイ	●	●			●		●		●		●					●			●	●					9	
アトリ科																										
カワラヒワ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●						15	
ハギマシコ																						●			1	
ベニマシコ	●	●					●		●		●								●						6	
ウソ																		●		●	●	●			3	
イカル													●													1
ホオジロ科																										
ホオジロ						●		●																		2
ホオアカ											●		●													2
アオジ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●					●	●	●					13	
オオジュリン	●						●		●		●		●		●		●								6	
ハト科（外来種）																										
カワラバト（ドバト）																						●				1
記録種類数	33	22	31	31	27	34	20	28	31	8	28	22	13	26	18	18	29	23	14	33	16	30	16	25		
参加者数	59	19	47	21	40	29	32	22	39	15	46	44	47	30	27	19	33	38	22	31	28	38	24	24		

※今年度から6月に、前年度の探鳥会記録（宿泊探鳥会を除く）を掲載することにしました。

※2012年6月2日の平和の滝と、2013年3月10日の円山公園は中止となりました。

※24回の探鳥会で記録された鳥は、43科134種で、1回平均24種でした。また、参加者は1回平均33名でした。

平成25年度 総会報

日 時：平成25年4月12日(金)午後6時30分～8時00分
場 所：かでる2・7 110会議室

小堀煌治会長の挨拶のあと、議長に白澤昌彦氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり可決、承認された。

〈議事〉

1. 平成24年度事業報告

[総務]

(1) 野鳥写真展の開催

開催期間：平成24年5月7日(月)～5月17日(木)

開催場所：北電ギャラリー

出 展：18名、34点

(2) 「野鳥だより」の発送（168号～171号）

(3) 野幌森林公園自然ふれあい交流館写真展

開催期間：平成24年6月1日(金)～6月30日(土)

出 展：18名、34点

(4) 新年野鳥講演会、野鳥写真映写会の開催

日 時：平成25年1月12日(土)

13時30分～16時00分

場 所：かでる2・7 520研修室

講 師：玉田克巳氏

（北海道立総合研究機構・環境科学研究センター）

演 題：沈黙の春 再来？

参加者：80名（野鳥写真提供者5名）

(5) 北海道野鳥愛護会名入りカレンダーの作成・販売

(6) 定例幹事会の開催（各月1回、計12回）

(7) 傷害保険の更新

[広報]

- (1) 「北海道野鳥だより」168号～171号の発行
- (2) ホームページの維持・運営

[探鳥]

- (1) 探鳥会25回（1回平均32.8名）

[会計]

- (1) 平成24年度決算報告
- (2) 平成24年度会計監査報告

村野紀雄監事、吉中宏太郎監事から適正に処理されている旨の報告があった。

2. 平成25年度事業計画

[総務]

- (1) 野鳥写真展の開催

開催場所：札幌市男女共同参画センター

開催期間：平成25年5月13日（月）～5月24日（金）

- (2) 野幌森林公園自然ふれあい交流館写真展

開催期間：平成25年6月1日（土）～6月30日（日）

- (3) 「北海道野鳥だより」の発送（172号～175号）

- (4) 新年野鳥講演会、野鳥写真映写会の開催

平成26年1月11日（土）開催予定

- (5) 北海道野鳥愛護会名入りカレンダーの作成・販売

- (6) 定例幹事会の開催（各月1回、計12回）

- (7) 傷害保険の更新

[広報]

- (1) 「北海道野鳥だより」172号～175号の発行

- (2) ホームページの維持・運営

[探鳥]

- (1) 探鳥会27回（宿泊探鳥会を含む）

[会計]

- (1) 平成25年度予算

[その他]

- (1) 当会の今後を考え、会員増加対策、ホームページ上の「北海道野鳥だより」の公開等について議論した。

[役員人事]

川路則友会員が広報幹事に加わった。浜野チエ子および原美保総務幹事が会計幹事に移動した他、若干の幹事移動があった。担当兼務については、副会長によるもの以外は原則として取り止めるが、担当以外についても相互に協力するものとした。

[平成25年度役員]

顧問 藤巻 裕蔵

会長 小堀 煌治

副会長 戸津 高保、樋口 孝城、白澤 昌彦

監事 村野 紀雄、吉中宏太郎

会計幹事 横山加奈子、原 美保、浜野チエ子

代表幹事 岩崎 孝博

幹事

（総務） ◎畠 正輔、品川 瞳生、清水 朋子、
竹内 強、辻 雅司、中正 憲信、
松原 寛直

（探鳥） ◎坂井 伍一、梅木 賢俊、門村 徳男、
北山 政人、栗林 宏三、後藤 義民、
佐々木 裕、佐藤ひろみ、田中 陽、
富川 徹、成澤 里美、早坂 泰夫、
鶴田 善幸

（広報） ◎樋口 孝城（兼）、川路 則友、島田 芳郎、
白澤 昌彦（兼）、高橋 良直、武沢 和義、
道場 優、戸津 高保（兼）、道川富美子

（◎印は各担当の代表者）

平成24年度 決算書

(収入の部)

項目	予算額	決算額	予算比(▲減)	備考
個人会費	490,000	502,000	12,000	
家族会費	99,000	123,000	24,000	前納、後納を含む
団体会費	15,000	10,000	▲5,000	
事業収入	40,000	52,020	12,020	参加費、売上金他
雑収入	11,782	4,667	▲7,115	利息他
寄付金	10,000	16,380	6,380	個人寄付
小計	665,782	708,067	42,285	
繰越金	394,218	394,218	0	
合計	1,060,000	1,102,285	42,285	

(支出の部)

項目	予算額	決算額	予算比(▲減)	備考
印刷費	460,000	435,088	▲24,912	野鳥だより印刷費他
通信費	120,000	109,330	▲10,670	会報発送費、切手代
会議費	40,000	58,100	18,100	幹事会、総会会場費
交通費	16,000	18,500	2,500	発送時交通費
消耗品費	20,000	28,538	8,538	腕章、幟、用紙代他
報償費	55,000	40,000	▲15,000	事務所費用
傷害保険費	16,000	15,180	▲820	保険代
雑費	10,000	2,000	▲8,000	設備利用料
予備費	223,000	0	▲223,000	
基金積立	100,000	100,000	0	
次年繰越	0	295,549	295,549	
合計	1,060,000	1,102,285	42,285	

平成25年度 予 算 書

(収入の部)

項目	本年度予算	前年度予算	前年比(▲減)	備考
個人会費	520,000	490,000	30,000	前納、後納を含む
家族会費	105,000	99,000	6,000	
団体会費	15,000	15,000	0	
事業収入	45,000	40,000	5,000	
雑 収 入	9,451	11,782	▲2,331	
寄 付 金	10,000	10,000	0	
小 計	704,451	665,782	38,669	
繰 越 金	295,549	394,218	▲98,669	
合 計	1,000,000	1,060,000	▲60,000	

(支出の部)

項目	本年度予算	前年度予算	前年比(▲減)	備考
印 刷 費	450,000	460,000	▲10,000	野鳥だより印刷費
通 信 費	120,000	120,000	0	会報発送費、切手代
会 議 費	45,000	40,000	5,000	幹事会、総会会場費
交 通 費	20,000	16,000	4,000	発送時交通費
消 耗 品 費	20,000	20,000	0	事務用品他
報 償 費	55,000	55,000	0	事務所費用、講師謝礼
傷 害 保 険 費	16,000	16,000	0	保険代
雑 費	10,000	10,000		設備利用料他
予 備 費	164,000	223,000	▲59,000	
基 金 積 立	100,000	100,000	0	
合 計	1,000,000	1,060,000	▲60,000	

積立基金特別会計

(24年度収入決算)

(25年度収入予算)

項目	金額
積立金	400,000
一般会計より繰入	100,000
合 計	500,000

項目	金額
積立金	500,000
一般会計より繰入	100,000
合 計	600,000

会員数

	21. 4. 1	22. 4. 1	23. 4. 1	24. 4. 1	25. 4. 1
個人	271	260	255	256	270
家族	36	38	39	39	41
団体	2	3	3	3	3



野幌森林公園

2013. 2. 3

【記録された鳥】オジロワシ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ、スズメ、ウソ 以上16種

【参加者】秋山洋子、五十嵐加代子、今村三枝子、内山英晋、大表順子、太田敏枝、栗林宏三、グローズ千鶴子、桑原みは子、後藤義民、坂井伍一、高橋貞夫、野田貴代子、畠 正輔、浜野チエ子、濱野由美子、広木朋子、藤田 潔、辺見敦子、松原寛直・敏子、丸島道子、村田睦子、横山加奈子 以上24名

【担当幹事】畠 正輔、松原寛直

ロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、アオサギ、ダイサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、アカゲラ、カササギ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、キバシリ 以上25種

【参加者】石井健太、石田卓也、今村三枝子、岩崎孝博、内山英晋、菊池一豊、小林美奈子、佐伯武美、坂井伍一、品川陸生、高橋貞夫、高橋良直、中正憲信・弘子、原 美保、樋口孝城・陽子、松原寛直・敏子、丸島道子、村田睦子、横山加奈子、吉田慶子、鷺田善幸 以上24名

【担当幹事】中正憲信、鷺田善幸

野幌森林公園

2013. 4. 14

札幌市清田区 千葉 由佳理

私は、日頃から野鳥や自然に興味はあったものの、なかなか行動には移せずにいました。数日前に、たまたま区役所で“北海道ウォッティングガイド”を手に取り、偶然に14日の予定が無かったため、野幌森林公園での野鳥観察に小学2年生の娘と2人で初めて参加することに決めました。

朝、早起きしてお弁当を作り、地図とにらめっこして、

ウトナイ湖

2013. 3. 17

【記録された鳥】マガソ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、キンク

どうやって行くのかを検討。野幌森林公园の駐車場へ着き、通りがかりの人に大沢口を尋ねると全く違うと言われ、大慌てで教えてもらい、何とか間に合って到着できました。

うっかりしていたのは、ここ数日の暖かさで頭はすっかり春気分となっており、何のためらいもなく薄手のジャンパーと運動靴にスパツツという出立ちだったことです。皆さん長靴に防寒・防水の上下といった、しっかりとした装備。そして公園内にはまだ雪が沢山残っており、風も強くなってきて、一瞬「帰ろうか」という思いが頭を過りましたが、せっかく来たのだからと思い直してチャレンジしました。

雪解け時期の雪の下は水が少しずつ流れしており、地面に空洞が出来ているということを知らずに、娘は出発の第一歩から腰まで雪の中にはまってしまう始末でした。

その後も平均台のように細い雪の道を一列になり、足を滑らせ、ぬかりながら進みました。観察といつても、なかなか前方や上方へは目を向けられず、足元に気を取られながらという状況でしたが、周りの方々からフキノトウやミズバショウの芽が出ていることを教えてもらい、春を感じることができました。娘はアカゲラを見つけて大興奮したり、皆さんが双眼鏡で一生懸命に野鳥を追っている様子がわかると、2人で双眼鏡を奪い合いながら確認することもできました。シジュウカラのネクタイ模様や、ヤマガラの姿を正面から観察でき、本で見るのとは全く違う生き生きとした姿に感動しました。

配布された野鳥チェックリストを見ると、まだまだ色々な種類の鳥がいるということにも驚きました。機会があれば、また観察会に参加して鳥たちの姿と名前を覚えたいと思っています。

【記録された鳥】トビ、ハイタカ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、キバシリ、トラツグミ、カワラヒワ
以上18種

【参加者】青山和正、石田卓也、井上公雄、今村三枝子、内山英晋、川村宣子、北川博一、栗林宏三、小西峰夫・美美枝、坂井伍一、品川睦生、清水朋子、白澤昌彦、杉田範男、高田征男、高橋きよ子、千葉由佳理・愛歩、中田勝義、中村 隆、野田貴代子、蓮井 肇、畠 正輔、早坂泰夫、藤田 潔、辺見敦子、三井 茂、横田寛幸・さえ子、横山加奈子、吉田慶子、渡会やよひ
以上33名

【担当幹事】栗林宏三、畠 正輔

宮 島 沼

2013. 4. 21

【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、コハクチョウ、オオハクチョウ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、コガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、キジバト、カワウ、オオサギ、ダイサギ、チュウサギ、オオバン、カモメ、オオセグロカモメ、トビ、ハイタカ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、カワラヒワ、ベニマシコ、オオジ
以上24種

アイサ、カツブリ、キジバト、オオサギ、ユリカモメ、カモメ、トビ、オジロワシ、ノスリ、アリスイ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ムクドリ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、オオジユリン
以上32種

【参加者】阿部真美、内山英晋、栗林宏三、坂井伍一、佐藤ひろみ、品川睦生、島田芳郎、高橋良直、田中 陽・雅子、田村元春、玉田克巳・みづほ・かえで、中正憲信・弘子、浪田良三、蓮井 肇、畠 正輔、早坂泰夫・みどり、原 美保、樋口孝城、丸島道子、村田睦子
以上25名

【担当幹事】佐藤ひろみ、田中 陽

モ エ レ 沼

2013. 4. 28

江別市 瀬川 睦

初めて探鳥会に参加させていただきました。当日は強風のうえ小雨が吹きつける最悪の天気で、中止覚悟で集合場所を行ったのですが、思ったよりたくさんの方達がいらして驚きました。私は普段一人で野幌森林公园やモエレ沼を双眼鏡を片手にウロウロしているのですが、一人ではどうしても様々な鳥や植物を見ることや知識に限界を感じてしまい、もっと色々な事を知りたいと思い今回参加しました。やはりたくさんの目があれば、それだけたくさんの種類の物が見られるものですね。ヨシガモが見られた時には嬉しかったですし、ベテランの方は私が気付きもしない様な鳥を見つけていました。

初めての事に少し気後れしていた私に声をかけて下さり、スコープを覗かせていただいたり、予想以上の寒さで手袋を貸していただいたり、鳥についてのお話しを聞かせていただき、とても楽しく過ごす事ができました。是非次回も参加して、もっと聞きなしや特徴を覚えて、今以上に楽しむ事ができる様になればと思います。同じ趣味をもつ人がこんなにいるんだと思うと心強いですね。最後に今回色々と親切にしていただいた皆さんに感謝いたします。ありがとうございました。

【記録された鳥】ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、コガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、キジバト、カワウ、オオサギ、ダイサギ、チュウサギ、オオバン、カモメ、オオセグロカモメ、トビ、ハイタカ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、カワラヒワ、ベニマシコ、オオジ
以上24種

【参加者】青山和正、秋山洋子、井上詳子、岩崎孝博、白田 正、大表順子、川村宣子、北山政人、栗林宏三、坂井伍一、品川睦生、島田芳郎、瀬川 睦、高橋きよ子、高正みちえ、道場 優、中正憲信・弘子、野田貴代子、畠 正輔、早坂泰夫、樋口孝城・陽子、松原寛直・敏子、横山加奈子、吉田陽子
以上27名

【担当幹事】北山政人、道場 優

天売・焼尻島（宿泊探鳥会）

2013. 5. 3～5

北広島市 大谷 光良

GW中の3日間なら休みも取れるので、夫婦で初めて参加させて頂きました。しかし初日からフェリーが欠航し焼尻には行けず 急遽羽幌で一泊となり、翌朝一番の高速船で天売島に渡りましたが波高く、まるでジェットコースターに乗っているような感じでした。私は全く酔わないのでそれなりに楽しめましたが、多くの人が船酔いになっていたようです。

天売島に着くと観光バスにて島内一周。ガイドさんが小学生の時、寺沢さんが担任で、鳥を見つけて報告する役目で、それ以降鳥に興味を持ったと話してくれました。昼食後、小雨ぱらつく非常に寒い中足取りも重く、散策に出発しました。3時過ぎ、待望のヤツガシラの登場です。住宅の庭先でのんびりとお食事。猫に狙われるまでかなりの時間を居てくれましたので、じっくり拝めることができました。これで来た甲斐があったというものです。気分も足取りもすっかり軽くなりました。夕食後、ウトウの帰巣観察。私たちのグループ以外の人たちによるものですが、あちこちでカメラのフラッシュがバチバチ焚かれ、立ち尽くすウトウを見るとやりきれない気分になりました。

最終日、早朝5時より探鳥。朝食後、午前中探鳥。一瞬ですがヤツガシラの綺麗な飛翔を見ることができ満足。帰りの高速船は風いで、デッキに出て海鳥を見ることができました。寒さのせいなのか夏鳥が少なく、ツグミとアトリの姿が大変目立ちました。

今回はフェリーの欠航により予定が狂い、幹事さんは大変苦労されたことと思います。天候にはあまり恵まれませんでしたが、それ以上に楽しく旅をさせて頂きましたことに感謝致します。また機会があれば参加したいと思います。

【記録された鳥】

(羽幌港 5/3) ヨシガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、スズガモ、シノリガモ、クロガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、カンムリカツブリ、



【野幌森林公園】

2013年7月14日(日)、9月8日(日)

野幌森林公園も7月と9月とではそれぞれ異なる趣があります。大沢園地で昼食をとり、大沢口に戻るのは午後1時ころになります。

集 合：野幌森林公園大沢口 午前9時

交 通：夕鉄バス 新札幌駅前発（文京通西行）大沢公園入口下車 徒歩5分

JRバス 新札幌駅前発（文京台循環線）文京台南町下車 徒歩5分

アビ、ヒメウ、ウミウ、アオサギ、ウミネコ、シロカモメ、オオセグロカモメ、ハシブトガラス 以上19種

(天売島 5/4) ヒドリガモ、シノリガモ、キジバト、ウミウ、アオサギ、タカブシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ケイマフリ、ウトウ、トビ、オジロワシ、ヤツガシラ、アリスイ、コゲラ、アカゲラ、チョウゲンボウ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、キクイタダキ、ヤマガラ、ヒガラ、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、カラフトムシクイ、センダイムシクイ、キバシリ、ムクドリ、クロツグミ、シロハラ、アカハラ、ツグミ、ノゴマ、ルリビタキ、イソヒヨドリ、オオルリ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、アトリ、カワラヒワ、シメ、ホオジロ、カシラダカ、ミヤマホオジロ、アオジ 以上47種

(天売島及び天売・羽幌航路 5/5) ヒドリガモ、ハシビロガモ、スズガモ、シノリガモ、キジバト、アビ、オオハム、ヒメウ、ウミウ、アオサギ、オオジシギ、タカブシギ、キアシシギ、アカエリヒレアシギ、ウミネコ、シロカモメ、オオセグロカモメ、ケイマフリ、ウトウ、ウミスズメ、トビ、ヤツガシラ、アリスイ、コゲラ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、キクイタダキ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒメコウテンシ、ウグイス、ヤブサメ、ムジセッカ、センダイムシクイ、アカハラ、ツグミ、コマドリ、ノゴマ、ルリビタキ、ジョウビタキ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、ビンズイ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、シメ、カシラダカ、ミヤマホオジロ、アオジ 以上54種

【参加者】石橋和子、井上詳子、今村三枝子、岩崎孝博、大表順子、大谷光良・久仁子、岡部良雄・三冬、北川博一、栗林宏三、小堀煌治、佐々木 裕、志田博明、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋きよ子、高橋宣子、高橋良直、高正みちえ、立田節子、田中志司子、中島房子、中正憲信・弘子、西尾京子、畠 正輔、濱野由美子、早坂泰夫・みどり、原 美保、樋口孝城・陽子、松原寛直・敏子、丸島道子、道川富美子、村田睦子、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子、鶴田善幸・幸江 以上45名

【担当幹事】栗林宏三、佐々木裕、清水朋子、高橋良直、中正憲信

【石狩川河口】2013年8月18日(日)

秋の渡りのシーズンの前半に石狩浜・河口で主にシギ・チドリを楽しみます。はまなすの丘公園ヴィジターセンターの前から浜に出て河口まで、河口からは石狩川に沿って戻ります。全部で4kmほどの行程になります。正午近くに駐車場に戻って鳥合わせをし、センター内などで自由に昼食をとることになります。

集 合：ハマナスの丘公園ヴィジターセンター駐車場
午前9時30分

交 通：中央バス 札幌ターミナル発（石狩行）終点
「石狩」下車、徒歩20分

【鶴川河口】2013年8月25日(日)

鶴川河口付近の自然干潟や人工干潟でのシギ・チドリの観察が主目的です。天候次第ですが、人口干潟付近で鳥合わせをし、自由解散となります。「四季の館」に戻って館内ロビーで昼食をとられる方が大半です。館内には食堂や売店もあります。

集合：鶴川温泉「四季の館」駐車場 午前9時45分
交通：道南バス 札幌駅前発または大谷地バスターミナル発（浦河行ベガサス号）「四季の館前」下車

【いしかり調整池】2013年9月15日(日)

昨年まで9月に行っていた石狩川河口探鳥会に代わり実施する探鳥会です。秋の渡りのシーズンに、いしかり調整池にやってくるシギ・チドリを主に観察します。また、水鳥たちを狙って猛禽類もやってきます。調整池の周りでの観察でほとんど移動はありません。午前11時半頃に鳥合わせを行い、自由解散となります。天気が良ければ管理棟の周りなどで昼食をとることになります。

集合：いしかり調整池駐車場 午前9時30分
交通：公共交通機関はありません。

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。
☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具などをお持ちください。
☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465
午前10時～午後4時(土日、祝祭日を除く。)

「北海道野鳥だより」の
バックナンバーをHP上に公開しました

本会のHPで会報「北海道野鳥だより」を第1号から見ることができますようにしました。(pdfファイル)。トップページの「野鳥だより」からお進み下さい。

なお、公開は発行後3年を経過したものまでになっています。また、すべての記事に著作権がありますので、ご留意下さい。

HPのアドレス変更のお知らせ

上記に伴い、HPのアドレスが6月1日から変更されました。新しいアドレスは以下です。

<http://www.aigokai.org>

鳥民だより

◆平成25年度野鳥写真展出展者・作品◆

秋山 洋子	カワセミ
荒木 良一	シロハヤブサ、ホシムクドリ
石田 卓也	シマフクロウ、ギンザンマシコ
入江 智一	アカゲラ、クマゲラ
内山 英晋	オジロワシ、オオワシ
内山 純一	アオバト、ベニマシコ
穎川 洋志	オオジシギ、ギンザンマシコ
国本 昌秀	ホシガラス、クマゲラ
小堀 煌治	ダイサギ、マミジロ
佐伯 武美	クマゲラ、ノビタキ
坂井 伍一	ヤマシギ、キビタキ
佐藤ひろみ	マガンとサカツラガン、 マガンとシジュウカラガン
品川 瞳生	ヤマセミ、オオルリ
新城 久	ヒメハジロ、ハイイロチュウヒ
高橋 良直	トウネン、シジュウカラガン
田中 陽	ヤツガシラ、オオタカ
田向 一彦	フクロウ、クマゲラ
富川 徹	クマゲラ、コミニズク
中正 憲佑	キビタキ、サカツラガン
中田 勝義	サカツラガンとオオハクチョウ、 コミニズク
蓮井 肇	オオアカゲラ
早坂 泰夫	アカゲラ、フクロウ
道川富美子	コゲラ、シノリガモ
山田 甚一	ベニバラウソ2点
吉中宏太郎	カケス、カヤクグリ
若松久仁男	ムギマキ、ヒバリ

以上26名 50点

【新しく会員になられた方々】

丸島 道子	(札幌市白石区)
石川 徹	(札幌市北区)
井上 泉	(江別市)
三井 茂	(江別市)
小山 留美	(苫小牧市)
阿部 正幸・育世・亮空・悠和・真凜	(札幌市中央区)
加藤 長治	(札幌市豊平区)

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円（会計年度4月より）

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://www.aigokai.org>